新鮮力

新・地球世紀へのキーワード「共に生きる」

環境保全局水質地盤課　平成12年入庁
角田　定孝

ミレニアムイヤー、西暦二〇〇〇年も残すところあとわずか。今世紀は産業革命以来の経済発展に伴い、地球規模で環境破壊が進んだ世紀であった。では、いよいよ迎える新世紀はどんな世紀になるのだろうか。

「共に生きる」というキーワードが使われるようになり久しく経つ。多くの国の方々との共生を目指したボーダーレスな社会の構築、障害を持つ方々との共生を目指したバリアフリー構造、そして自然との共生を目指した多自然型川づくりなど、これらキーワードをとりまく様々なテーマも生まれている。

さて、イソギンチャクと「共生」するクマノミという魚がいる。このように「共生」とは、異種の生物が行動的・生理的な結びつきをもち、共同して生活することを指す、もともとは生物学上の専門用語であった。生物の世界では一方的な利益供与の場合もあるが、利益を互いに交換し合い相互発展するところから一般化した言葉なのであろう。

ここで、地球規模で「共に生きる」ことを考える。環境問題を例に挙げると、一九七二年、国際的な環境会議として初の国連環境会議が行われ、人間環境宣言（ストックホルム宣言）において「自然環境と人によって作られた環境が、人間の生存権のために重要である」とされた。その二十年後一九九二年、地球サミット（環境と開発に関する国連会議）におけるリオ宣言では、「持続可能な開発：サスティナブル・ディベロップメント」が提唱される。運命共同体＝地球を舞台にした、今後の人間のあり方が示されて来ているように思う。まさに新世紀は「共に生きる」世紀ではないか。

これらは人間の利益・都合のみを強く優先させてしまった、とかく独りよがりになってしまった二十世紀へのアンチテーゼなのであろう。「共に生きる」とはもたれあいではない、常に未来を捉えることのできる進歩する関係である。

これからの二十一世紀は地球を舞台に「共に生きる」者として、万象に前向きな連携を築いてゆきたい。

あとがき

横浜の郊外の風景というと、金沢区並木の高層団地から飛びおりて自ら命を絶った小学四年生のことが思い出される。大人の偽善が見えすぎたゆえに死んだといわれる彼が最後に見た「風景」を確認したくて、学生時代にそのマンションの屋上に上った。眼下の景色を眺めた時に、巨大な遊水池と整然と区画された住宅の向こう側に広がる「緑の崖線」の存在が印象的だった。彼は、最後の瞬間、自分の生まれ育った街と他の街とを遮断するようにして存在する「緑の崖線」をどのような気持ちで眺めたのだろうか。そう思うと、美しいけれども無機的で、圧迫感のある眺めだった。

この「緑の崖線」がかつての富岡の海岸線であり、実は、遊水池だと思っていたものが、並木の街が海であった証を示す「船溜まり」だということは市役所に入ってから知った。そしてその「緑の崖線」の風景が私の中で大きく変化したのは、並木の街とすぐ向き合うように存在する富岡東の街を良く知るようになってからだ。例えば、その街に八百年来、一族が住み続けているという連合町内会長の自宅に事業説明に行った時に、虚実交えて話される彼の話の合間に、縁側から見える良く手入れのされた里山の緑は、確実に「崖線の緑」と繋がっていた。

富岡の街に住む人々にとって、この「崖線の緑」は、富岡八幡宮の鎮守の森でもあり、それぞれの集落の里山と一体となって、この地の生業を代々支え、郷土の一体感を形成してきた生活に欠くことのできない緑なのだ。

生き急いだ小学生の眼差しと、齢九十を超える老練な連合町内会長の眼差しと、私たちは誰の立場に寄り添うかによって、同じ「緑の塊」もまるで違って見えてしまう都市に生きている。

横浜の郊外の奥深さは、ライフスタイルのみならず、「空間や時間」の意識すら異なっているかも知れない人々の住む地域が隣合って、モザイク状に織り込まれながら、存在していることだ。成熟化するということが、このような相異なる人々の意識がおしなべて平らに、馴らしてゆくことなのか、違いは、違いとして認め合いながら融和してゆくことなのか、それとも異なったまま平行線を辿り続けるのか、幸か不幸か二十一世紀まで生き延びた者の努めとして見極めていきたいところである。

＜関口＞

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「自主研究レポート」への投稿をお待ちしています。

応募される方は、事前に研究の概要をA4紙三枚以内にまとめて企画局政策部調査課までお送りください。

FAX　六六三-四六一三
お問い合わせは、
電　話　六七一-二〇二九

調査季報総目次　141～143号

●第141号〈二〇〇〇年三月〉

特集・自治体における合意形成～まちづくりの視点を中心に

1　鼎談・なぜ、合意形成か～その時代背景とあり方
――家田仁・卯月盛夫・金田孝之

2　都市施設と合意形成

①ドキュメンタリー・住民参加の道路づくり
――山本文雄・浜野四郎・杉山正美

②計画レベルの住民参加の一考察――山本文雄

③施設建設計画のあり方と説明責任
～北部方面斎場建設事業――編集部

3　地域施設の建設・運営と合意形成

①神奈川リサイクルコミュニティセンター
～市民参加による施設整備から事業運営へ
――松山弘子・赤荻道子・川口宏・宮川雄三

②使える洋館・体験できる洋館「山手234番館」
――大野裕子・五島哲夫

③コミュニティ施設の利用と合意形成～神大寺地区センターと神奈川区区民利用施設協会の取組
――牧野迪代・深沢啓子

④新治市民の森の愛護会づくり
～地権者と利用者の合意形成――田並静

⑤重症心身障害者の通所施設「明」の運営とまち
～地域資源としての障害者施設――編集部

4　合意形成を支える地域運営のしくみ

①行政と地域活動団体との新たな関係づくり
～保土ヶ谷区地域・まちづくり活動支援事業――鈴木隆

②区による新たなまちづくり～都市計画マスタープラン・区プランの策定を契機として
――武井伊織・鴇田傑・斎藤直子・小西真樹

③身近な地域社会の合意形成の土壌を耕す
――坂田弘太郎・大野木秀子・白川修己・村上佳江・加藤隆章・小林康夫・関口昌幸

5　横浜市における様々な合意形成――編集部

新鮮力／横浜の元気を受け継いで――山本有紀子

●第142号〈二〇〇〇年六月〉

特集・21世紀の地域産業政策

1　自治体の地域産業政策～成熟した高齢社会の到来を前にして――関満博

2　座談会・今、横浜に求められる産業政策とは
――草野惠一・関満博・前田壽

3　雇用の拡大に向けた地域産業政策と街づくり
――宮坂彰志

4　新産業創出への取組

①横浜市の新産業育成・支援策――今冨雄一郎

②産学連携の新たな展開と横浜市における連携支援システム――中島泰雄

③福祉関連（高齢社会対応型）サービス業成長支援事業
――八巻善賢

④SOHOYOKOHAMAインキュベーションセンター
――齋藤裕美

5　地域産業政策と街づくり

①京浜臨海部の再編整備と工業制限諸制度の見直し
――長谷川政男

②大型店と商業振興――浦崎真仁

③横浜の観光振興・三つの"Cha～Chance, Challenge & Change――増田文彦

④横浜市の企業誘致――石田正

⑤21世紀の横浜港湾関連産業の振興へ向けて
――渡邊圭祐

自主研究レポート／横浜市の社会資本の生産力効果について～最適水準と効果的投資分野の検証～――森隆司

新鮮力／記憶をつなぐ――中尾光夫

●第143号〈二〇〇〇年九月〉

特集・横浜とワールドカップサッカー

1　ワールドカップサッカー大会の横浜開催に向けて
――金近忠彦

2　座談会・コンベンション都市戦略としてのワールドカップサッカー
――三ッ谷洋子・嶋田昌子・太田　昇・西田善夫・魚谷憲治

3　2002ワールドカップ市民の会の活動とねらい
――宝田良一

コラム・国際メディアセンター

4　七万人の歓声が響く
～横浜国際総合競技場の運営戦略――木村重治

5　日韓共催の意義～スポーツの歴史と現状から
――大島裕史

6　横浜とスポーツ文化の振興

①市民と生涯スポーツ――鈴木英夫

②ワールドカップサッカーの開催とスポーツ文化の振興
――岩倉憲男

③サッカー振興における横浜サッカー協会の歴史と役割
――藤木隆明

④次世代のスポーツ環境～イギリスとの比較を通して
――神林飛雄史

コラム・横浜育ちのJリーガー
――永山邦夫・有馬賢二・中村俊輔・大橋正博

7　横浜のサッカー文化

①横浜にサッカー文化の種を播く～横浜F・マリノスのホームタウン活動――松本喜美男

②横浜FCの誕生と新しいチーム運営
――インタビュー・辻野臣保

③横浜と少年サッカー――堀内正明

④総合スポーツクラブを目指すNPO「かながわクラブ」
――内田佳彦

⑤フットボールクラブ本郷（FC本郷）と栄区サッカー協会
――吉川　勝

⑥座談会・指導者の求めるサッカー環境
――内田　渉・野地芳生・伊藤陽介・石井和則

新鮮力／サッカーの街横浜――吉田　剛

調査季報

144

2000年12月

編集・発行
横浜市企画局政策部調査課

〒231-0017横浜市中区港町1-1
TEL.045-671-2029
2000年12月27日発行

横浜市広報印刷物登録
第120139号
類別・分類A-BA011
デザイン　サウスビア
印刷　株式会社ガリバー

ISSN0387-8899
この印刷物は再生紙（古紙混入率70%）を使用しています